平成19年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（④美05-07-2/5）

第41回オープンレクチャー「人とモノの力学」

当研究所では、美術史の研究成果を広く公表するために公開学術講座「オープンレクチャー」を秋に開催している。昨年度までは美術部の主催であったが、機構改革に伴い本年度より企画情報部が引き継ぎ、昭和41年度の開始より41回を数えることとなった。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、２日連続で開講し「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。

なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は、２日間でのべ276名の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、168名から回答を得た(回収率61％)。結果は、「たいへん満足した」105 名、「おおむね満足した」60名、「不満が残った」５名を数え（複数回答２名)、回答者の97％が満足感を得たことがわかった。

第１日：2007（平成19）年11月２日（金）午後１：30～４：30、東京文化財研究所セミナー室

・「光琳の目と手」江村知子（企画情報部）

京都の高級呉服商雁金屋に生まれた尾形光琳(1658-1716)は、俵屋宗達の影響を受けながら、すぐれた意匠感覚と写生に基づく迫真性を融合させて独自の画風を確立した。宗達絵画の特質の一つに豊潤な水墨表現があげられるが、宗達の影響を色濃く表す光琳の作品に「四季草花図」（津軽家旧蔵、個人蔵）がある。この作品の成立過程を辿りながら、光琳芸術の特質を考察した。

・「矢代幸雄の琳派観」中部義隆（財団法人大和文華館）

大和文華館は1960（昭和35）年10月31日、第一回展「開館記念名品展」の開会式を迎える。作品蒐集をはじめ、美術館構想を託されたのは、初代館長、矢代幸雄であった。この展覧会の58件の出陳作品には、８件の琳派作品が含まれる。この講演では、日本美術の国際的評価の向上に尽力した矢代幸雄が、琳派作品にどのような芸術性を認めていたかを考察した。

第２日：2007（平成19）年11月３日（土）午後１：30～４：30、東京文化財研究所セミナー室

・「矢代幸雄と美術研究所」山梨絵美子（企画情報部）

昭和５年７月、洋画家黒田清輝の遺言によって現在の東京文化財研究所の前身である美術研究所が開設された。このアジアで初めての美術研究所の具体像をつくったのが、ボッティチェリ研究のためにヨーロッパに留学し大正14年に帰国した美術史家矢代幸雄であった。矢代の構想、そして美術研究所を通して矢代が日本にもたらしたものについて考察した。

・「黒田清輝のフランス体験―芸術家村グレーから黒田記念館へ」荒屋鋪透（ポーラ美術館）

黒田清輝の画業および日本の美術制度への貢献に大きな影響を与えた、彼のフランス留学、とりわけパリ近郊の芸術家村、グレー＝シュル＝ロワンでの芸術体験とはどのようなものであったか。絵画に描かれた場所とそこに住んだ英国の作曲家ディーリアスの資料など、フィールド・ワークと周辺領域の渉猟を通して、画家の足跡を辿った研究方法を紹介した。